

The 38th

TOKYO MOTOR SHOW

Commercial & Barrier-free Vehicles

2004



News vol.2

平成16年11月4日

第38回 東京モーターショー2004 ◎ 働くくるまと福祉車両



“一般公開”子供づれ、若いカップル目立つ

一般公開の3日は文化の日、早朝から快晴に恵まれ各ゲートとも開門(午前10時)を待ちわびる来場者の長い列ができていた。休日とあって若者から中高年者と幅広い来場者層が訪れ、とくに子供づれや若いカップルが目立って多かった。

場内はビジネスマン風の人は展示車を熱心に観察、若者やファミリー層は各種イベントを楽しむなど参加・体験型ショーは好調なスタートだった。



▲開門前に待ちわびる来場者(中央ゲート)

「環境と感動」をテーマに、楽しい商用車の未来を提案

トヨタ自動車



▲ルーフに2基のプラズマディスプレイを備えた「ハイエース サウンド サテライト」

中央ホールに大きなブースを構えるトヨタのテーマは、昨年に続き「ECO×EMOTION:環境と感動」。(1)商用車の楽しい使い方(2)誰もが安心して乗れる福祉車両(3)環境対応技術の展開状況の3つをポイントに、参考出品6台、市販商用車および市販福祉車両11台の合計17台の車両を並べている。

トヨタの次なる技術開発の理念は「Today for Tomorrow」。その心は「お客様



◀「Today for Tomorrow」の開発理念を打ち出したトヨタブース



▲子供のカートレースをクルマに乗ったまま楽しめる「レジャースエース マイ カート ファクトリー」

と社会のために何をすべきか考え、それを実行すること」(張富士夫社長)という。

メインステージのパフォーマンスショーは、トヨタが開発したトランペットを吹く2足歩行ロボットの登場で始まる。そして来場者の目は移動スタジオの「HIACE Sound Satellite」に釘付けに。サイドドアが観音開きになると、DJブースやレコードターンテーブルが出現し、クルマと周辺は一転してClubのステージへと変貌する。ハイエースの新しいビジネスユースへの提案である。

レジャーユースの極めつけは、レジャースエースのラゲージスペースを上下2台分のカート・ガレージにできる「REG-IUSACE MY KART FACTORY」。整備道具も積み、セカンドシートを横向きにすれば、そのまま親子で行くカートレースの観戦シートに早変わりする。



▲安全フロントランナーを代表するASVコンセプトL



▲左ハンドルにも対応できるグローバルハイブリッドバン



▲「つぎの夢へ」をスローガンとした日野の“青い”ブース

「将来を見据えた日野の姿をぜひ見てほしい」と近藤詔治社長の語るがごとく、12台もの参考出品車を揃えた上に、そのうちの半分をハイブリッド車で占める未来指向。市販車2台を含むほぼ全車にホログラムを施したブルーのボディカラーで統一し、水と青空の環境保全をイメージ化。また、フロントガラスにはすべて、今回のモーターショーのスローガンとした「Movin' on next」(つぎの夢へ)のシール文字が鮮やかに映える。

安全フロントランナーの代表格「ASVコンセプトL」は、

運転者に優しいユニバーサルデザインを採用。全方向モニタリングシステムや後側方警報システム、衝撃緩和の新スタイルキャブなど数々の安全装備に守られた先進長距離輸送車である。

国内だけでなく世界市場をターゲットにしたのが「グローバルハイブリッドバン」。このため左ハンドル仕様にも対応している。運転席から荷室に楽に移動できるウォークイン1BOX設計、Bピラーレス大開口のスライドドア、やはり世界を見つめた左右対称形のダッシュボード、一体型携帯コンピュータなども嬉しい次世代集配車だ。

市販予定車を一挙に8台繰り出し、軽の近未来技術を誇示

ダイハツ工業

「スモールカーのリーディングカンパニーを目指し続ける」(山田隆哉社長)ダイハツは、「ビジネス」「ライフ」「エコ」の3つをキーワードに合計12台を出品。このうち1年以内の市販予定車を一挙に8台も揃える意欲的な取り組みを見せる。次世代の軽商用コンセプトカー「FFC」は、すみずみまで荷物が積める直方体荷室を実現し、室内で立ったままの作業を可能とした。両側スライドドアや低床フラットフロア採用のフレンドリー・カーゴである。

環境対応では軽商用車として初のハイブリッド車となる「New HIJET CARGO Hybrid」を出品し、来年夏に発売。

660ccガソリンエンジンにモーターの組み合わせで、燃費をベース車より30%も向上。排出ガスも平成17年排出ガス基準75%低減レベルを達成している。

技術展示においては、「インテリジェント(自己再生)触媒」やイオンを検知して燃焼を制御する「i TOPAZ」を熱心にとぞぎ込む人が多かった。アイ・トパーズは、パワー、エコロジー、信頼性のすべての面でトップレベルを目指すダイハツのパワートレンドだ。



▲「ワンドラブル スモール未来系」がテーマのダイハツ・ブース



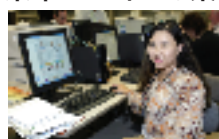
▲軽商用初のハイブリッドカー。



▲直方体荷室で立ち作業が可能な「FFC」

記者の目

福祉車両の多彩さにびっくり。
来年のショーも楽しみです。



文匯報(中国)
楊 雪丹さん

今年6月に文匯報の東京支局に異動してきました。東京モーターショーの取材は初めてなのですが、予想以上に高度な内容で、興奮しました。一番驚いたのは、福祉車両の商品ラインナップが多彩なことでした。下肢不自由者をはじめ、いろいろなハンディキャップを持つユーザーが交通社会に積極的に参加することができるというのは、社会全体にとって非常に幸福なことだと思います。環境技術についても、先進的な技術が数多く出品されていて、大変面白いと思いました。環境問題は1国ではなく、地球規模で解決していかなければならない問題ですが、モーターショーで展示されたこれらの先端技術が、世界の環境問題の解決に寄与するのは素晴らしいことです。来年以降も東京モーターショー取材する予定ですが、今回のショーを見てますます楽しみにになりました。

BODY

自立型福祉車両をはじめ提案 モデルが多数展示

中央ホールには車体メーカー各社が多くのモデルを出品。バラエティに富んだ展示スペースとなった。トヨタ車体は商用車と福祉車両の二本立て。車いすに座ったまま運転できるトヨタ「ヴィッツ」ベースの自立型福祉車両にはとくに力が入る。関東自動車工業は競技用車いすなどを収納できる「アイシス スポーツモビリティ」を参考出品し、ハンディキャップアスリートなどがアクティブライフを楽しめるコンセプトを提案している。



▲世界最高水準の安全性を確保した新大型トレーラーを展示する小平産業。

クセニッツ・ジャパンはフォルクスワーゲンのバンをベースにフルオリジナルボディを架装したCNGシティバスを展示



▲トヨタ車体は車いす使用者が自分で運転できる車を提案。

し、エコロジー時代の都市交通を提案。小平産業は世界最高の安全性を実現する新型トレーラーで大量一括輸送のニーズに応える。極東開発工業は、重量物を荷室に持ち上げるパワーリフターの新モデルおよび塵芥収集車を、ホール屋外では花見台自動車がセフテローダーを展示している。

PARTS

排出ガス抑制、省燃費など 環境対応技術が出そろう

商用車、とくに大型車両の排出ガス規制が世界的な関心を集めるなか、西ホールの部品ブースでも環境関連技術の出品が目立つ。

豊田自動織機は中型バス用としては世界初となる可変容量型エアコンコンプレッサーをはじめ、CO₂冷媒コンプレッサー、燃料電池部品、ボッシュ・オートモーティブはディーゼルエンジンの低公害化に寄与する高圧燃料噴射ポンプなどの最新技術、愛三工業は電子制御スロットルなど、無駄な燃料消費を抑制する技術を通じて環境対応のコンセプトを提示。商用車ユーザーが強い関心を寄せるディーゼル車の排出ガス後処理



▲ディーゼルの普及が進む欧州の次世代技術を展示するボッシュ。



▲豊田自動織機は燃料電池、可変容量型コンプレッサーなどの環境技術を展示。

技術も展示されている。日本ガイシは粒子状物質を削減するDPF、NO_xを後処理によって無害化する尿素SCR触媒など、カルソニックカンセイはDPFのほか、燃焼温度を下げてNO_xの排出を抑えるEGRクーラーなどを展示し、ディーゼル車の排出ガスコントロールの道筋を示した。

トピックス TOPICS

働くくるまと福祉車両の 同乗試乗会に大勢の希望者

東京モーターショーショーで毎回好評を博している同乗試乗会。今回はラインナップに福祉車両が増え、試乗会場は大勢の試乗希望者でにぎわっている。会場の外に1周約1kmの試乗コースを設営。試乗を実施しているメーカーのブースで試乗券を受け取ったユーザーが順次希望のモデルに試乗していた。福祉車両への関心も予想以上に高く、一般ユーザーが体験試乗する姿も見られた。



ステッカーが子供に人気 日本自動車工業会コーナー

中央ホール西寄りに設けられた日本自動車工業会コーナーでは、自動車ユーザー全般を対象とする啓発活動が行われている。パネル展示は「リサイクルへの取り組み」「地球温暖化防止」「クルマの税金について」など5テーマ。愛・地球博における自工会パビリオン「ワンダーホイール展・覧・車」の模型展示や安全運転の啓発のために配布された黄色のステッカーが、子供の人気を博していた。



日産自動車

豊富な車種と多彩な機能バリエーション

「お年寄りから身障者まですべての人に外出する喜びを楽しんでもらいたい」。2日のプレスブリーフィングで松村矩雄副社長は、日産が取り組む福祉車両、つまり「ライフケアビークル」の基本コンセプトについてアピールした。日産では福祉車両を「特殊なクルマ」ととらえていない。「新しいファミリーカー」と位置付けており、利用者の障害の程度や利用目的に応じて、さまざまなケースに対応する豊富な車種と多彩な機能バリエーションを展開している。



▲この9月に発売した「ティダ」のアンシャンテタイプ。

今回のショーでは出品車両21台のうち9台が福祉車両。ワイヤレスリモコンの操作でクルマの乗り降りが楽になる「助手席スライドアップシート」を装備した「アンシャンテ」タイプをはじめ、車いすのまま車内に乗り込める「チェアキャブ」、身障者でも自分で運転ができる「ドライビングヘルパー」の3つのタイプを展示。ブースレイアウトもバリアフリー化を積極的に進め、移動しやすく見やすい工夫をしている。

マツダ

家族全員で楽しさ、快適さを追求

出展テーマは“Zoom-Zoomを分かち合おう”。家族全員で楽しさ、快適さを追求するという、その価値を福祉車両にまで広げている。介護する人の使いやすさと、介護を受ける人の乗り心地を最優先に考えた福祉車両をラインナップ。今回のショーでは福祉車両を5台出品。いずれも市販車で、この6月にデビューした小型車「ベリーサ」の助手席回転シート車をはじめ、「デミオ」のスロープ式車いす移動車、「MPV」の全自動セカンドリフトアップシート車などをブース中央に出品している。



▲「デミオ」のスロープ式車いす移動車などを展示。

シンポジウム

11月3日(水・祝) 13:30~15:00/国際会議室

「バリアフリー社会の実現と私たちのあるべき姿」 福祉車両・交通バリアフリーからみた日本の未来

(社)日本自動車工業会

●司会・進行役

広石拓司氏(UFJ総合研究所EDISONゼネラルプロデューサー)

●パネリスト

加藤哲也氏(カーグラフィック編集長)

羽中田昌氏(サッカー解説者)

溝端光雄氏(東京都老人総合研究所介護・生活基礎研究グループ総括副参事)

デーブ・スペクター氏(放送プロデューサー)

徳田克己氏(筑波大学大学院人間総合科学研究科教授)

福祉車両は本当に身近なものなのだろうか……。シンポジウムでは長寿社会が進む中で飛躍的に増え続ける福祉車両について、その歴史や担ってきた役割、その変化などをパネリストがそれぞれの立場から語り合い、次いで、バリアフリー実現の意義やユニバーサルデザインの本质、これからのクルマ社会、交通バリアフリーがどうあるべきかなどを探った。会場には若いカップルや家族連れなどが多数来場、福祉車両への関心が一段と高まっていることを物語っていた。



11月3日(水・祝) 13:00~18:00/中会議室201

自動車排ガス規制への取り組み ～地球環境と未来の車社会への挑戦～

スウェーデン大使館

●講師

ミカエル・リンドストロム氏(駐日スウェーデン大使)

斉藤隆志氏(日本貿易振興機構理事)

鈴木秀章氏(東京都環境局自動車公害対策部計画課長)

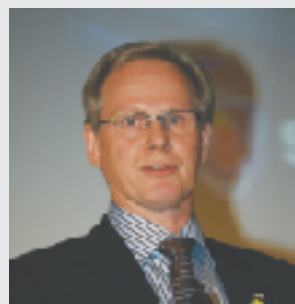
ハッセ・ヨハンソン氏(スカニア開発担当副社長)

インゲマル・デンプラット氏(チャルメッシュ工科大学教授)

エリック・フリデル氏(チャルメッシュ工科大学助教授)

カール・カイザー氏(ハネウェル技術開発担当役員)

ディーゼル車の排出ガス規制は、世界各国で大きな関心事となっている。ディーゼルのクリーン化に関して、スウェーデンの第一線の技術者4名が自らの経験と業績のもとに講演を行い、その後、技術的な可能性などについてパネルディスカッションが行われた。自動車業界関係者ら約200人が参加し、議論を傾聴。18時からのレセプションでも、意見交換がさかんになされていた。



ハッセ・ヨハンソン氏(スカニア副社長)



参加・体験型イベントが盛りだくさん!

南休憩ゾーン

トラフィック戦隊アンゼンジャー

・11:00~11:25 ・14:00~14:25 ・15:30~15:55

南休憩ゾーン

キャンプ・ネボス

・11:35~12:00 ・13:30~13:55

The 38th
TOKYO MOTOR SHOW
Commercial & Barrierfree Vehicles
2004

11月3日の入場者数 **53,500人** 入場者数累計 **66,000人**

東京モーターショーニュースVol.2 2004年11月4日発行
発行所 社団法人 日本自動車工業会 広報室
〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館
TEL.03-5405-6119 FAX.03-5405-6136
WEB SITE www.tokyo-motorshow.com

JAMA